

駅の匂い、土地の香り

歳を重ねるにつれ視覚や聴覚は衰えていくのに、嗅覚だけは鋭くなっていくと聞いたことがある。子供の頃からひどい花粉症だった私も、最近になってそのことを実感するようになった。特に、老眼というものを自覚するようになって、明らかに衰えつつある視覚の代わりに、身体がおのずと外部情報を視覚から嗅覚にシフトしようと試行錯誤しているのを感じる。電車に乗っていて駅に降り立った時など、これまで気にしていなかったのに、真っ先に匂いを気にするようになった。実際、駅や街には独特の匂いがあるものなのである。

最初に意識したのは京都だった。年に数回訪れるようになって、いつも同じ匂いがするなあとと思うようになったのだ。それは、お粥の匂いに似ている。何か穀物をとろとろ長時間炊いたような、ほのかに甘く温かい匂いが京都の町全体にたちこめている。

これが大阪となると、同じ煮炊きの匂いでも、おでんとか煮込みの湯気という感じがする。湯気の下には、しつかり味のついた具や、お好み焼きなどのソース文化の気配が漂っているのだ。名古屋方面はまた独特で、名鉄や地下の商店街は、どこことなく甘酸っぱいような、女性的な匂いを感じる。

面白いのは、巨大な京都駅の中でも近鉄奈良線のホームに足を踏み入れた瞬間から、そこには奈良の香りが漂っているような気がするのだ。駅舎を出た線路のほうから、いつもほんの少し苦味と渋



イラスト・岡林玲生

味のある柿の葉の香りがすうっと吹き込んでくるような錯覚に陥る。榎原神宮駅など、神宮と呼ばれるものがある場所はどこも駅から出たとたん、神宮の杜から緑の風が吹いてくるような気配すら感じる。伊勢志摩に行った時は、駅を出たとたん「風光明媚」の四字熟語が頭に浮かび、明るく香ばしい風を嗅いだ気がしたものだ。

近年印象的だったのは、仕事で日光に行った時だった。東武鉄道を降りたとき、線香のような匂いを嗅いだのだ。気のせいなのかかもしれない。しかし、日光東照宮という家康の霊廟の気配が土地全体に満ち満ちており、ずっとその匂いを

感じ続けていた。元々そういう土地だったからなのか、霊廟が建てられたからなのか、謎である。長年乗っていた京王井の頭線では、渋谷に出る度にいつも同じ感想を持った。ああ、ここは谷なのだ。周囲から流れてきた風や気、あるいは欲望が、あの巨大なスクランブル交差点を中心に溜まっているのだ。ホームで電車のドアが開く度、そう思ったものだ。どこなくくぐもった、不穏に湿った匂い。

私は鈍行列車が好きである。ひとつひとつの律儀に駅に停まり、ドアが開き、その街の匂いが流れ込む。通過待ちの時に、開いたドアの向こうの季節の気配を感じるのには列車ならではの時間で、ふと忘れていた何かを思い出すのだ。

文・恩田 陸
Riku ONDA

1964年、宮城県生まれ。早稲田大学卒。1992年、『六番目の小夜子』でデビュー。2005年『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞、本屋大賞を、2006年『ユージニア』で日本推理作家協会賞を、2007年『中庭の出来事』で山本周五郎賞をそれぞれ受賞した。近著に『エンド・ゲーム』『メガロマニア』『六月の夜と昼のあわいに』『私の家では何も起こらない』などがある。